

書翰初學抄

草書石刻日々二用ル所ノ文章漢文上中下ノ書分ケテ
 記ス書狀ヲ認ルニ此書ヲ見ヘテ用テ達シ不足ナレド
 アニタ板行有レ共石摺ニテナキハ手跡正レカラズ

子昂	千字文	大字楷書全二册	赤壁賦	楷書中字	全
石刻	千字文	中字楷書全	戀花帖	楷書中字	全
	千字文	中字草書全	初聞帖	大字行書	全
承光殿	大字行書	文徵明 全	秋興八首	烏石楷書	
洛神賦	細字楷書	文徵明 全	渭水帖	文徵明 大字	全
秋興賦	細字楷書	董其昌 全	草決百韻歌	枝山	全
廣澤	公子行	草書中字	飲中八仙歌	草書大字	
先生	蘭亭帖	草書中字	醉翁帖	行書中字	
石刻	赤壁賦	行書中字	君王帖	八分行草中字	
品目	長恨歌	行書中字			

日東尺牘

祐齋先生書 日用ノ書翰文法ヲ總集シ唐ノ書翰認方 并ニ
 人倫草木魚鳥都テ異名其外書翰要用ヲス

石 刻 目 録

日本宋時記卷之五

秋 渾書律曆志云秋分之日地氣漸涼...
 秋分之日地氣漸涼... 氣之清也... 天氣之清也...
 秋分之日地氣漸涼... 氣之清也... 天氣之清也...

秋分之日地氣漸涼... 氣之清也... 天氣之清也...
 秋分之日地氣漸涼... 氣之清也... 天氣之清也...
 秋分之日地氣漸涼... 氣之清也... 天氣之清也...

逢たか小たか時たかの勝たか氣たかともぬたかりたか冬たか食たか泄たかとなは

若たかしたか論たかよたかくたか夏たか乃たか末たか秋たかの初たか寒たかとりりたか甚たか一

子たか時たか衣たかとぬ裸たかとて涼たかと貪たかりりりたかなりたかれたか五

勝たか乃たか膈たか穴たか背たかと令たかひたかと人たかとて癆たかとめく

風たかと取たか又たか衣たか足たかと露たかせたかの風たか背たかと入たか中たか風たかの

涼たかと衣たか切たかぬたかこれたかとはたか一たか父たかと一たか癆たか所たかとと

若たかてたかハたか味たか比たか夏たか死たかと服たかと一たか二たか白たかと忌たかと葱たか蒜たか

月たか令たか度たか義たかよたかくたか條たか之たか月たか收たか斂たかと一たか葱たか揚たか統たか純たかす

多たか事たかとたりたかれ

撥たか生たか湯たかよたかくたか秋たか氣たかをたか燦たかとり宜たかくたか胡たか麻たかと食たか一

てたかろたかれたか燦たかと洞たかと一

若たかしたか論たかよたかくたか冬たか衣たかと衣たか事たか甚たかとやたかとのの

疾たか或たか癆たか痛たかと多たかくたか新たか穀たか初たかと熱たか一たかたたかりたか時たか老たか人

これたかとくくたかの宿たか疾たかと多たかくたか新たか米たかたたかと或

食たかハたか風たか事たかと初たかと一たか又たか早たか指たか乃たか米たか熱たかと一

時たかとりてたかやたかと米たかと比たか香たか美たか才たかりたか志たかりたかと一宿たか疾たかと

多たかくたか一たか癆たか痛たかと多たかくたか一たか能たか脾たか胃たかとやたかと一能たか數たかと一

病たか人たかと一

月たか令たか度たか義たかよたかくたか秋たかもたか甚たかと老たか人たか精たか足たか乃たか也たかゆたか然

事たかと一骨たか之たかの微たか火たかと用たかと足たかをたかあたかゆたかと一と一

焚せしむらるるがれあうくわ代りやまのよき
小児丸をわく火よ火りす

撮金満よりく煉乃呂きく水とのとあがりたる
衣服と忌事と忌

金匱要畧よりく秋九十日金銀の脚と食へり
ま東垣よりく古人の云秋薑と食ふがれんとて

志氣と信せしむ晦夜修練を又秋薑の人の
天年と天のくく孫子遼りやくく九月

おろく薑と食へるまよ下り眼と寒まのと換
筋力と減す

七月

立秋ハ七月の月の中○七月の美名 七月ハ秋
律と夷那とよ○七月の和名と文月とよ七日
すれくくよ甲とくくあこくくく

六日沐浴

七月七夕と云又星夕ともいふなり 新芝薬師祀よりく

七月七日織女牽牛夜合乃あまり

五雜俎よりく織女牽牛の事 後母傳記よりく或
く妄言とわげ物志よりく乗槎乃浪夜と祀せり

まゝ婦人女子の傳く言葉とて信を可なり人
星士考よりく帝徳より天上乃列宿として汚穢と

穢くむらるる亦やしむるを忌み一頁なりと考

日く海小確強と云つ處し此事ゆゑ也
又久しと云ふとありて心何れ人も想て
多しやと云ふ事皆奇の料と云ふはげよ
何れと云ふ事何れも何れも又
は事なることと云ふもたも何れこれと云ふ
ことと云ふと云ふれざ家なり新株此意を風相
を於多し皆事乃料を何れと云ふ人々
此事と云ふこと何れぬこと又信よと云ふ
二星の頃といふ葉田雜記よ七月七日の夜
酒海なることと云ふことと云ふ何れ何れと云ふ

七夕のうゝの葉葉集よと云ふことと云ふ

何れ川水にけ葉の輝風何れと云ふことと云ふ

古今集よ一丸河内羽恒

年といふことと云ふ七夕のぬると云ふことと云ふ

よと云ふ事無風

葉と云ふことと云ふ七夕の年といふことと云ふ

續指邊集よ指天網と云ふ事

何れと云ふ事何れと云ふ事何れと云ふ事

新拾遺集よ一葉園白と云ふ事

いづれと云ふ事何れと云ふ事何れと云ふ事

新法撰集よる治親王

中元夜の夜をわくく七夜乃た元世契の終りなれり
七夕乃竹杜牧

雲階月地一歩も来抵経年引恨多最恨明朝
波車雨不交回脚踏天河

又 晏殊

野性波斗柄秋驚慵鳥慢の移運天使精衛
塔河漢一水還無有盡時

又

織女牽牛雙扇開年々一夜更何事言天上

掛おとせ移勝人間去不回

○今日靈舞とくふ事りり十節記よもくむり
氏乃好み七月七日は記すそ盡鬼報となり今
病とつよむむられ病日はねよ素餅とくろくゆふ
そ病日はあつりそ素餅とくろくの盡とくろく後
人これ日靈餅とくろくの瘧病とくれえり

は後たりりなりお前とくろくす且支瘧の外風を
暑溼と感し肉飲食色恐し傷れて病りよめ
月夜母を夏傷は暑秋の瘧瘧と力そりあられ
く擡生せりとのづりりあつらんたひ此

日索解と食したるをて病根元と云ふ所一をハ
るれ髪とまぬり多事ゆんや決してこれ相
を一世の人かほ高言と作さくつ

○今般二星とあるとて凡果と云ふぬ食物をせり
香花と云ふは華のくくは五色の糸をつし梅も中
あま男女のこも本能事猶とい乃其衣これと乞巧
眞といふあり或衣服と驟し書とてさくは事
ありは事日存とては天年勝實七年いんりあり
しとて事根原よ見えたり 織女空の彼次短夜歌
は遠守とては作あり 又
七夕早ふとては奇を華乃悉くを記と視とてり

て枕乃多よやくとて新勅撰集の奇よ

あまれよのあさるまきの玉はさみ新撰枕乃とては
乞巧奠乃事兼財化風土記并とてはとてはこれ
又うれ如久しと事なりとてはとて婦人書
たももまにけ事となさる可なり越々たて
乃とてお事よはりし書籍衣服とてはとては
の困ふとて事よや都達を腹中の書とては
洗威を擗鼻禪とてはとてはとてはとては
今多集よ結因法師の奇

七夕乃昔れ夜とてはとてはとてはとては

陳秉受の七夕の詠

天上の如く星の如く物も亦も昔教習新秋送るの世事
多見戴不招人間乞巧橋

揚子江七夕の詠

禁令牽牛急意何須過織女并金梭年乞典
人間巧不造人巧亦多

○今日華丸と合せ麴と地てよしと雪は月令より
たりは日皮裘と曝せの垣はと雪後七織に
又角蒿と取く毡襦書籍の巾は玉の露と碎く
赤塾車親又刃くり

十二日二日より今日まで乃百あふくざり日西一
慍塵を拂ひ塵を掃とわけて塵埃とたふさぐ
へ一凡塵塵をたふさぐ一年に二つ一たつが
よ一冬塵塵をたふさぐと一日に二つ一たつを
よ一夏塵塵をたふさぐと一月に二つ一たつを
よ一月をたふさぐと一日に二つ一たつを
○坐る人乃秋風をそよばせたりおよむやうな
くより酒市におどろり又窓をたふさぐ所の
とら乃世よりつらき事今乃世信よむるもの
たり死せる人をもたふさぐとまらぬよ今も人の

おたのむがうれいさのきく後たうへい

○今世世倍れ人をた認のまのたそく火と燃し
のゆよあきと燃るる多有り思ふま思ふ世にせむり又たす
士思ふたの人を習く世せむりや佛氏乃後み
まといふ家よと夜社先乃社盡来降すく世ひ
か家よりたし事とあひ人多いといひたす
くそ終りされい血難終りも中元乃お父祖と密せ
し子終りる人冠服とまきくいゆよ出るるといひ
揖讓し社と奉りて入奉りて又これと送てお友思
乃海と焚よいられと獻らうとわまふらう

まをわの家車ののゆらふらう

十五日今日と中元と云國俗蓮華飯と製して本家

よ家一親戚小と云 梅とられ事 抱紀 今世七月十
後代度ぬ事乃公割本削竹工巧也今人新以作爲國祭加其前
以新經中貯雜饗果食法目蓮救世畫像 念之 慈之 善之 功之 今九
世の事ハハハハ 又さのや父母之社代墓と掃淨し今日墓と
祭し此夜今宵墓のた燃と燃す 月全座義の中元夜を
たつとこれよ 三づりあきくちま煮食し先社考社代靈牌と
あして燃食とろく火海果とばらねて焚らるらうと
又此夜たらうと養華經よ七月十五日祖先と修儀し
奉食して墳墓と掃すしゆりこれ後唐乃後又志しひて

かくははらうなるらう一其のく久しとや言て聖人乃
 道よわくもせ禮義なり一西道よ志行の人のあを改
 ざりて身 朱子のころく韓親の俗を改めよの好 一又か仕事と由
 せしめて修又志のざんとかうの先祖の靈を又能食と
 るあ墓取よりて孫一墓前又焼籠とい概すト
 先祖は靈あよ食とせらる母孫のて祖先は
 ちいざらにすううは凡今夜も世俗をざりて親
 ある人の墓よりて孫一親の人のうはくは四代
 まえの親ある人のきき一さうあう一をせやた人
 をう一さうせり一たてたのニ世たるうは是なり

凡衆時た有るれきとう一たふ事多一中
 一七月十五日盂蘭盆の夜に佛經より一命
 目蓮母と救ふ事とせうて其世と次をたは老
 學者筆記よりた有教中元は素饌と先祖一
 うか竹とせし盂蘭盆の形よりうか紙後とて中
 身行へこれと竹のたよりけ出と付くやとてこれ
 修う方湯と凡そ冬に室暖とてこれと盂蘭盆
 やり又夏新報をも竹といて研て之勝とて一
 一不織袍富たもて盂蘭盆とて又米飯と修く
 一先祖と尊一秋に菓事と考るとて一先づい

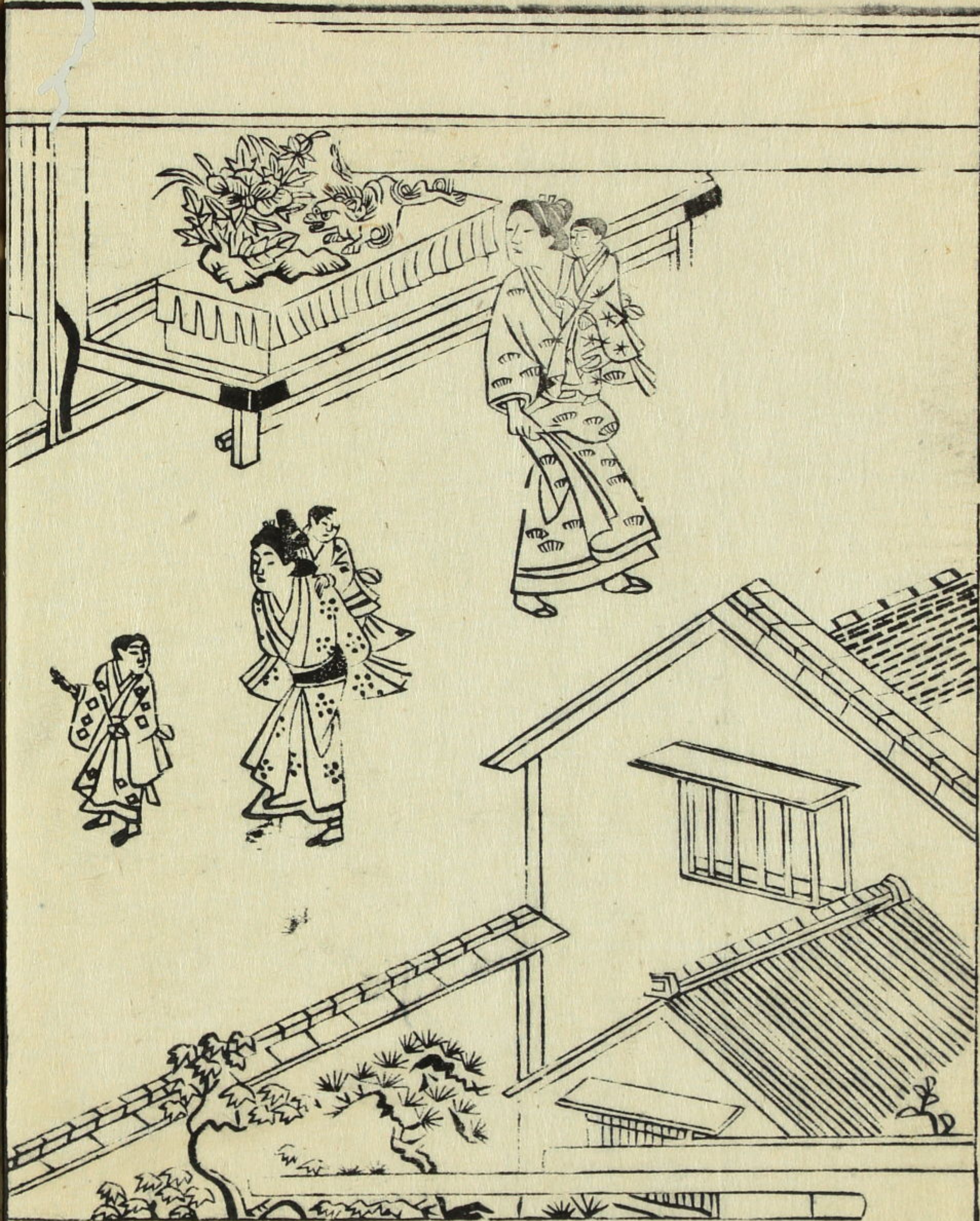
より乃風俗と云ふ事と云ふれは其の事と云ふ事
源氏目蓮の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
たしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
みく孟蘭盆乃休養と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
又年と始と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○五雜紀より云々七月甲元日孟蘭盆會となり目蓮の
母徳鬼道女痛下方有るは功徳と云ふ事と云ふ事と云ふ事
志く食と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

乃後と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
極樂世界と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
てこれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○能書より十七八載と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
乃又と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ゆりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
乃又と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
又報能と云ふ事

○又と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



又桶^か竹筒^{たけとう}に^て^は池^{いけ}よひ^て一^まと^り又^は桶^か又
 板^いと^も内^{うち}と^も久^く志^ぢが^た減^へは^らせ^り昔^{むかし}板^いと^りの
 上^{うへ}に^か蓋^{ふた}と^して^きた^らむ^かぐ^とと^り一^まと^り妙^た世^よと^れハ
 や^まの^り取^とり^の時^{とき}に^は日^ひに^あり^てあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 わ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 通^とる^と蓋^{ふた}の^り垂^たり^て揺^ゆら^ぎて^おけ^せす

天氣^{てんき}好^よ時^{とき}に^は代^{しろ}寄^よせ^り竹^{たけ}漆^{しつ}と^も奴^ぬ僕^{やく}の^り命^{いのち}一^まと^り志^ぢが^た紙^{かみ}を
 他^た一^まと^り製^{せい}法^{ぽう}は^ら先^{まづ}と^りあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 の^り折^をり^の水^{みづ}と^もた^ら紙^{かみ}の^りと^ひて^は一^まと^り一^まと^りあ^らむ^と
 と^りあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と

金^{かね}紙^{かみ}を^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 志^ぢが^た加^かえて^のの^りと^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 ち^ぢと^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 て^は一^まと^り堅^かめ^め紙^{かみ}の^りと^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 契^{ちぎ}原^{はら}に^はあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 ら^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 づ^づと^も他^たの^りと^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 て^は一^まと^り守^{まも}り^のと^もあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 く^くあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と
 と^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^とあ^らむ^と

よりて、宅中へ入、菰蔞葉とつちくまけ、八穀食たり
 去る六月の後まきへー菰蔞を中すくちへーこれを
 ちやくすべし根ぬへー七月初まきへー菰蔞蔞辛
 菰蔞も菰蔞と同所へまきへーちやくすべし根ぬへー
 宅中へ入、宅中へまきへーまきへすへー胡蔞蔞と六月
 乃初まきへも可あり大菰蔞中菰蔞とまきへ四、大菰蔞苗
 とわりちやくす少菰蔞根とまきへ四
 六月の末、菰蔞皮とむしむ法、菰蔞橋と取たりごとま皮
 とむしむ日又乾す

四月菰蔞と食ひりかへし、まきへすへー場、菰蔞のりとと害す、菰蔞

食へ、八月と採す、麻蔞をくくへ、氣とくくへ、菰蔞
 とくくへ、神氣とくくへ、息氣と多く食へ、人と傷り
 菰蔞と食へ、氣とくくへ、次、菰蔞と多く食へ、暴氣
 亂を多し、生薑と食ひりかへし、肉多く食へ、神氣
 と採す、立秋の後、菰蔞餅及水波餅と食ひりかへし
 去、秋、去、後、十日、凡と多く食ひりかへし、次、
 去、七月、菰蔞、菰蔞、くくへ、冷水と多く吞へり、此、
 菰蔞、菰蔞、たぐく、後、日、まきへりて、病と生す、又、七八
 月、乃、菰蔞、菰蔞、まきへり、まきへり、時、節、生、冷、乃、物、果、菰蔞
 と多く食ひりかへし、菰蔞、乃、氣、肉、又、滞、まきへり、瘧、疾、とく

まじき怨よまじり候

七月ハ十六候才一強風玉才二白霧津才三雲霧才

右立秋の三候あり才日暮乃多才五五地

始肅才六未乃登右才五才五候たり

立秋昼申六刻十分夜申十刻五分申才五分申

五申才十刻十分夜申十刻五分申才五分申

八月御八月の常秋候ハ八月乃中ハ八月の是名仲秋月也

櫛櫛律律と申才と才八月の初日と才八月の終日と才八月の終日

朔日倍ハ朔と云今日ためもと人才物と送碓と

事何り事根深よととこれりを更ふ本元才又

西禮才是ある才世俗の風儀あり或假名記は建也

年号乃時り事何りたら先八回のとととと

と折後也とととととととととととととと

とり又亦明才大岡れ又承の記は七八年一り氣

結よ天下に流布せりとのとととととととととと

比乃事なり久きり或後才六後院才一才五才五才五

て加威通方才才五才五才五才五才五才五才五

と先才五才五才五才五才五才五才五才五

才一才五才五才五才五才五才五才五

内へはさしあひきりなるとも、
 色所りたる事、所す、
 化を和明なる、
 あり、
 去、
 づ、
 於、
 ま、
 わ、
 下、

一、
 宣、
 以、
 ら、
 あ、
 ち、
 事、
 と、
 ま、
 今、

の物後代後より始まる事一は久しき事
了る人終りされど延壽式は家法事なるを凡
そ承りて國史より抄録されはうもそ
傳り終る事根原乃後とわすしとて一は
近世りては中一傳り終る事物後とて書
ぶる色ハ協書する人の筆力とてしる事
をそしるなりぬる多し一今此書より用
ゆる事又今此書より秋乃回教乃もの
といふ由も田のまれつわらとてなり
あしとてハ月朔腰となす佐と氣と騰騰とす

月令廣義潜確類書なるに及てり晴ハ田穀ハ新
かりと終る事此名を是ハ日ハ此ハ朔の禮義と氣
一不難せる事一なり

○今日 禁裡より 將軍家より物初り又 將軍家
より色ハ此類上ハ終りたる事なり一
十四日 明夜ハ陰晴くるもこれハ是ハ此ハ月と
貴し一 陰明後ハ八月十日長れり

銀屋敷考 露晴垂玉 侯初と欲圖 時は陰晴
陰定貴明夜陰晴未可知

十五日 中秋といふ秋九十九日ハ此ハ中乃の意なり 國俗

今日、幡言乃わらりやと致生會とすはし事人
 皇四十四代元正天皇乃所立貴徳四年九月又大隅
 日向支園乱逆すは也母四衰より流家字依の
 へ被言乃新定幸徳勝波豆采新軍と引卒志く
 被圖と征し事成牙く殺とそくまりるはら
 心徳乃以死宣よは度の合我母多く此人と殺しけ
 右新軍會とあはしより一死記すしくこれハ徳國よ
 してあましくい故とそくひりりし一被棄記に
 見えりるまてくよりるへ被乃所棄すまはつて
 して死すては儀と行あり

は事りるくくを同修さくくや終樂合編よ
 日本八月十日致生會呈百歳其樂有中國言
 簾曲部と志りるり年中の事合よ新中細
 事かては風流をさくくいさるるとも新中細
 ○今をわ秋れは中みくはよ月松葉はつあよ月夕
 ともこ五夕ともい新人證客乃勝と致はつたあり
 林は心那植よとく今秋月と致はるり大くま
 危れせより誓はして得ん文人を縁や和とんとも
 古樂府又嬉嬉起乃如河の激人の中秋月を記よ
 たりては如と征らと有りはは流れせりりもあ事

月又のろくにほると骨餅と繋いでさうくの
 状にゆり月餅とがしとおとくり又月餅を瓜
 等と合りて看月等とともふり月令廣教より
 歐陽詹既月時序云月之為既冬則擊霜大寒
 別蒸重大寒中散月霜後入散与後作言既秋之
 於時後夏先冬八月於時季如孟冬十五於時夏月
 之中。稽於天運別定無均取於月數別據龜圖。况
 埃壙不流大穴無。蟾蜍細細博海上浮昇東林
 入西橋肌骨与之疎涼。秋与之清冷。

○事云西宮月秋よりく月也水之精。秋也金氣

金水性相生。其外其事。別知天運。同相感各以類
 水。以金還。蓋月。因秋。更清。氣。秋。彼之。地。人。惟。不。信。

後古今集より天房乃清言

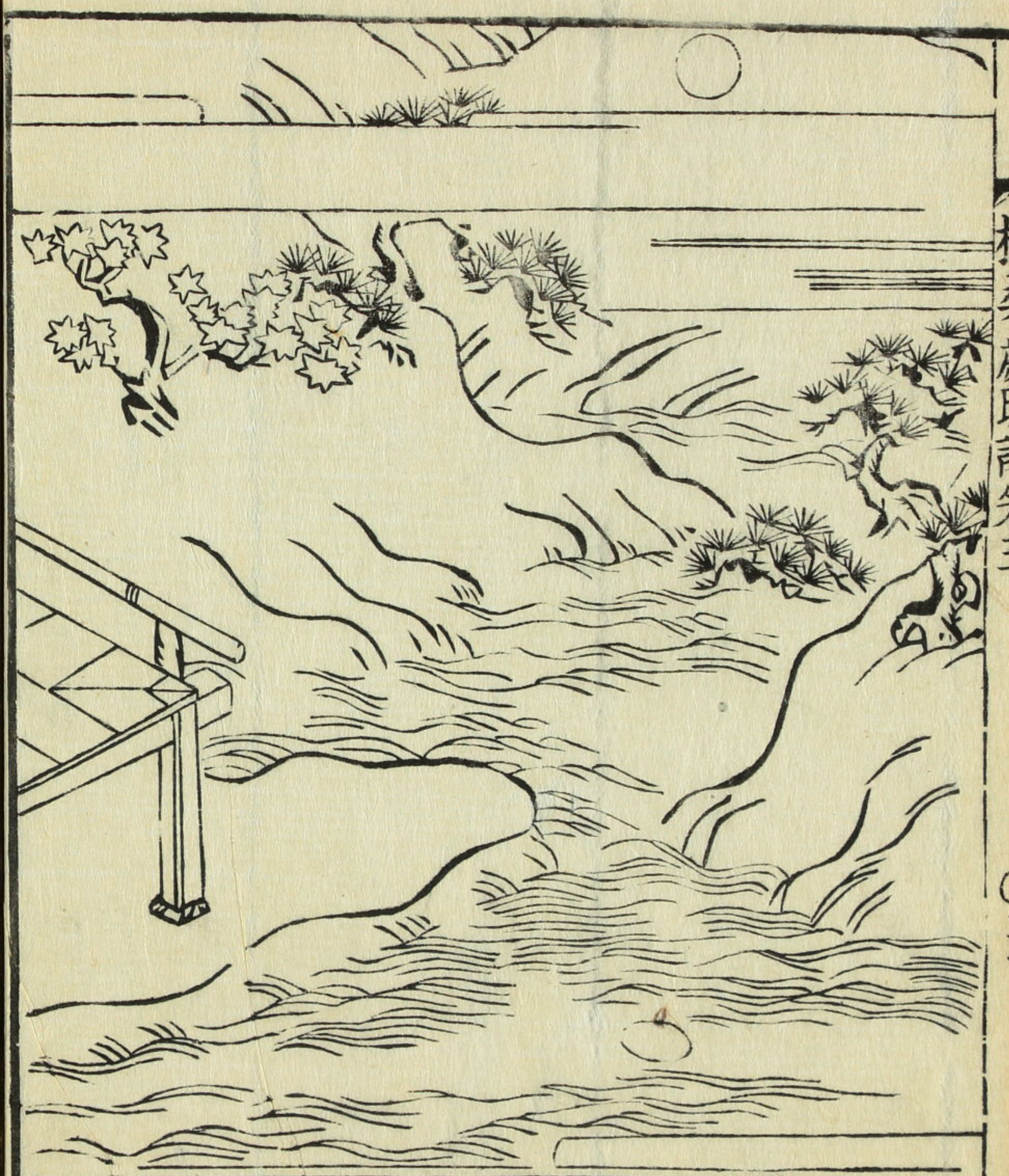
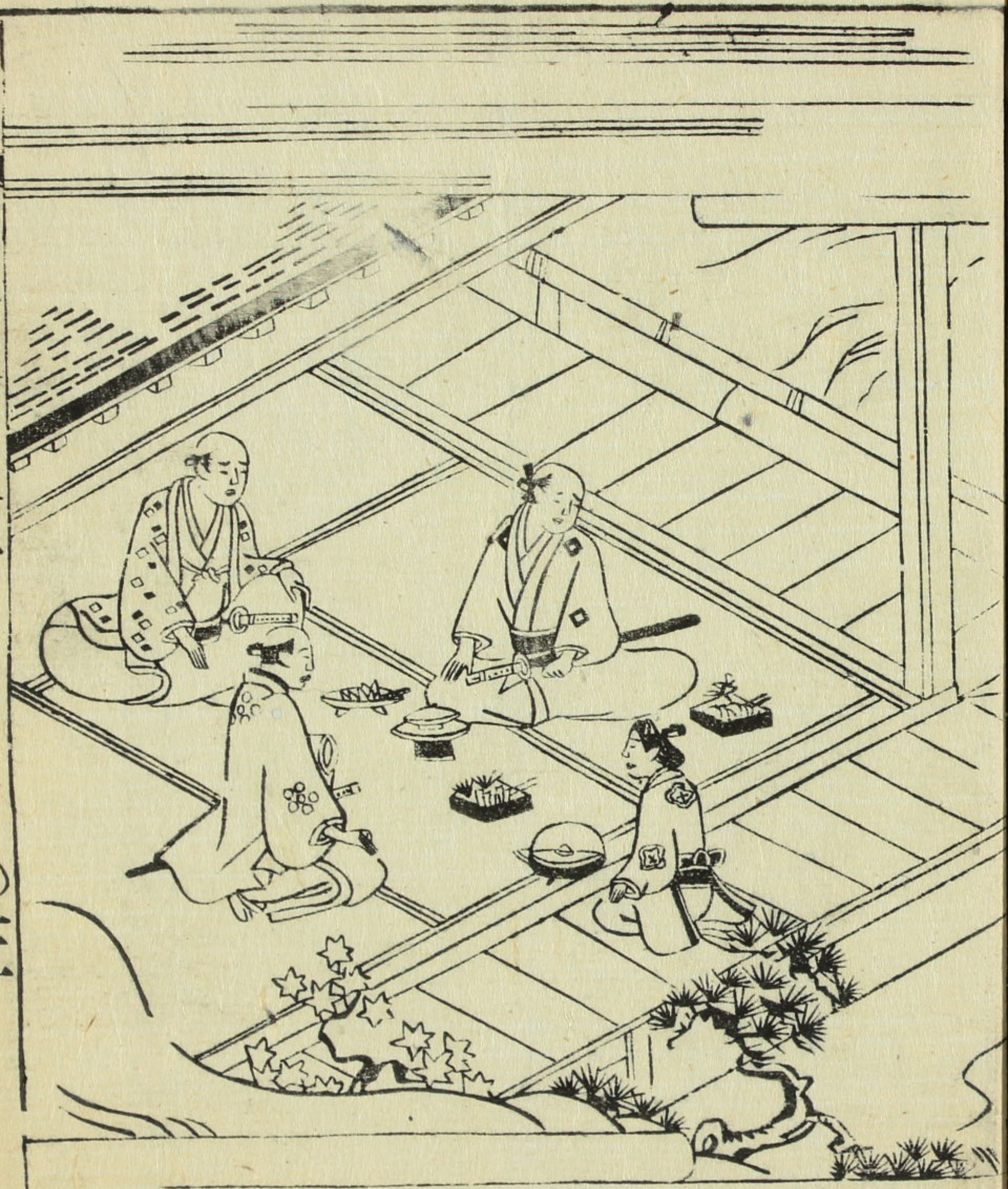
月とひる月かきと村のまの月とひる月うを記

新勅撰集より也逢逢法師
 うるくはと妹乃中え志くぬかきよひよは月一かきん

地所一集より元家
 阿多ハ又博其事也ぬかき月ハたのみの

金葉集より源親房
 さやうさひひかへ月影とさひひかへぬかき

梅系月言卷五 五



張景安の中條乃得よ

可也秋空掛玉盤 搜橘香 愁多意 四國此月

曾也別人自今肯 冷眼看

雜詩 競く得よ

夜々池邊倚月生 却悲此夜 易天明 迥雅引取

秋江水添入 網壺報曉更

杜子美り得よ

海月飛明鏡 伴心折 大刀勢 蓬以地 甚 攀柱仰天

冰臥疑霜雪 林樹見羽毛 此時睡 白兔 重欲數 秋

邵康節乃得よ

一年一度中林夜 十度中秋 九度法 未滿 玄須尚

夜中 蕭明仍候 到天心 覺重 照更 情非 淺不 睡

親時 志多 深 洗 老 古 人 詩句 好 何 堪 千里 共 今

○今夜 關岳 桑と 角の 花 燈 以て その の こ 多し と

月令 度 數より 足さ たり 又いそぐ 牡丹と 梅一 載る 事

今日 一々 一 常 兵よ 宜く 候る 根と 淨く 洗へ

香酒と いそぐ 洗へ 丸 妙 たり

二十七日 孔子乃 生れ 浴ひ 日あり

晦日 沐浴

神と云ふる事何（洗は二月の節）世俗禮と云ふ原天と
（くう）を祀（ぬ）世俗禮と云ふ原天と
（ぬ）を祀（ぬ）神祇とあがせて
物族の祀と云ふ所の多し其家淫祀と云ふ人
乃政と云ふひりるの風俗と述べて
秋は社日（名）社日と云ふ事あり但中邦も八九月
比去他の神と云ふ乞と云ふ秋社（名）を（名）ふるや
志くればそり社日（名）の多し淫祀多しゆんや村に
と不冬の日（名）つれも農高（名）他家も他村も志くれば
ぬも饗（名）饗乃密多し事多しはと云ふの饗（名）饗（名）財と
費（名）一亦（名）亦とや細りものあり一も比彼湯（名）湯（名）國

中此祭日只一日と用べしと命せらる乞も人能（名）能（名）別
有る一又世俗八九月去地乃神と云ふ何（名）能（名）能（名）何
まこと製して亦密（名）密（名）親戚鄰里と云ふ事
何りもろくも神日（名）の多し何りもろくも
祭は社日（名）社日（名）酒（名）酒（名）と云ふ事
上旬（名）日と推（名）推（名）各（名）各（名）と云ふ
祭分乃日考（名）始（名）始（名）社日（名）社日（名）と云ふ一なる事一法（名）法（名）と云
より後陰氣日（名）は去一日もやう厚くも社日（名）
祭りて日（名）祭（名）ひも乞（名）乞（名）温（名）温（名）と云ふ一なる事一法（名）法（名）と云
乃雨と云ふ事何りぬ

月守の後郊野は越報す

は月守の地所の人の新穀と穀とて征せの重き地
る所ら親戚と容す

此月強風多り時人多く風は威して瘠瘠と風は越
宅中より上向より多く松葉書と前へ宅中より露後

くやぐ様と多りすは月守の地よりさすり春
葛草蒺藜も上向の初前へ葛草はあつて四葉が親

西向より生れ二月はさう由御座りし月守
はあり繁葉にあつてさすり中秋の月守は

あつたれはさすり土はあつたれはさすり
しけりあつたれはさすり

べられを苗として志多れといふくはさすり

紅豆のこくと收養一棧た養と生あつてさすり

たぬよりさすり世御の結胸一壺を入りて結
てとく一は此はこれの由とさすり又元養のよと

取收養一
熟したる葉と胸して後葉して肉と割きと去り收

養一は生れりと蒸るあり一奉養と八月が次採去
一は元養の親宅より入てさすり

とらふ有性阿

げ月葉と搗（）はま葉華葉のくく元採根多の八月採去

至秋枝系於枯津洞隙處（）下亦秋採宜晩（）每葉華葉各

限其本熟也（）とらふを記す

げ月竹ととれ（）唯す（）月令廣敷の八月（）有は採和半句と

やうと貯置（）元採和半不煎法う（）は皮と火

あくとやうその煙あくと羊とあひとれ（）承く不煎す

書る麦稗の灰汁をく洗（）りてす（）海草よ之（）也

汲（）したるも虫とす（）はら幹後柄矢葉木刀号（）也

げ月又搗（）大釋と收（）ま（）布と市（）紅紙と用（）絹布

と染毒をく（）はら外用也

せ月天象漸冷なり多く生果と食（）りて次生蒜維（）持并

生蜜雞子蟹（）と食（）りて又萌芽と食（）りて忌

毒をく（）書書月令（）重（）及七蕺（）よとく（）は路月法（）乃

流泉と飲事（）かり人（）を（）て瘰脚軟（）と奇（）せしむ

八月の古候才一（）階（）風（）才（）之（）玄（）才（）之（）祥（）才（）九（）響

着（）太（）白（）霧（）乃（）之（）候（）才（）中（）雷（）如（）收（）才（）九（）響

轟（）振（）才（）去（）水（）如（）涸（）太（）秋（）分（）乃（）之（）候（）才（）九（）響

白露登（）五（）十（）刻（）十分（）夜（）早（）七（）刻（）五（）十分（）秋（）分（）登（）五（）十

刻（）夜（）五（）十分（）月令（）廣敷

死下也房これと云々これ母命は如わりの也
 其の世人九日と云々の毎々少くも此の菊酒との
 婦人茱萸囊と帯るをけかたむ人 此後を延命草
修すかゝる五
 雜記よりく九日茱萸と佩ひきよあがり菊酒とのむおぼ
 費長房桓景と云々と此の神と教つていさうれ本朝と云ふは
 西系雜記は殿史人の傳見賈佩蘭の中にもありて九月九日蓬
 と食ひ菊酒とのむゆゆせん人をして也云々ありて此は
 下りは之てをも由と云ふ使と傳多ハ漢代
 下りは之てをも由と云ふ使と傳多ハ漢代
 と引て之の茱萸と辟邪氣と菊酒と延命
 客といふは九日び二つ物とかりて酒九乃死と消
 とはとちん悪夢とてをいけ祝後授とすうにたす
 周系の國系は九月九日律也射の南り數九か

るはよ俗にけ日と尚んと茱萸房と打て改
 挿む気悪氣と辟除して初氣とあせぐをさ
 と云り是なん西後たり又今日菊酒とのむ
 長壽のあしむを物法菊七節の時花を莖葉を
 其の春來にまぐいそこれと藥一昨年九月九日
 此と取あしてこれと飲るこれと菊酒とのむ
 西系雜記より云々下り
 ○五系位代中人日と陰と上巳掃卒七夕重陽ハ中
 系もを契とる西代俗はまりの十月日ハ祝
 去と陽敷とありと云りこれ古人陽と尚と

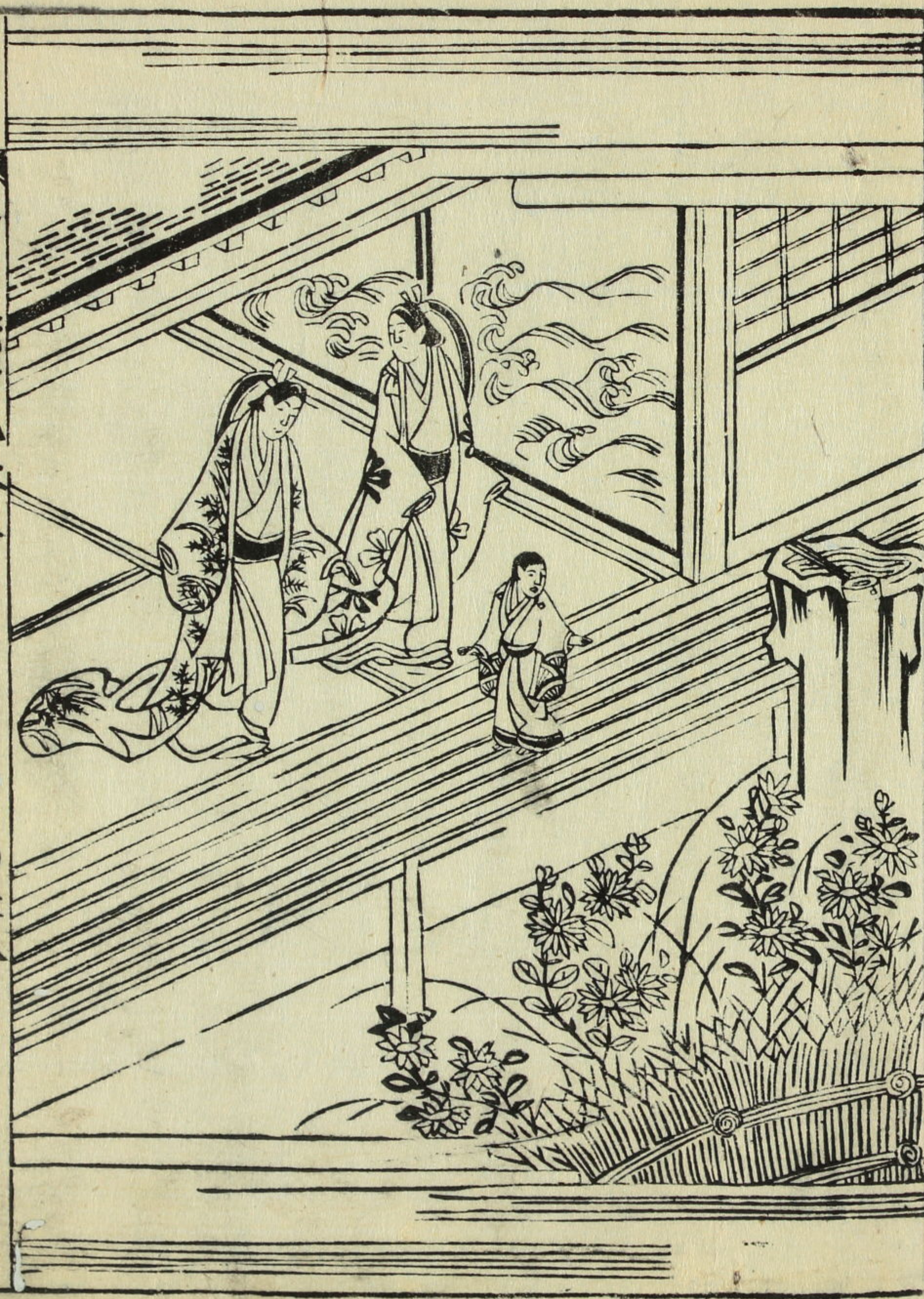
なりし昔の事なればなりは後甲一さきに古人
の言ふこといふ下とさつ庵し其の又後くは義
と云ふ波野王屋系織女桓宗もくといふ職
ては由し守その事修るれり

續千載集より新院別当典信

の事代孫汝多て丸多の子女はまて丸れ道徳の事
を座百さといふ事

八月やまふと西宮代花の枝よ万世榮るを此上人
張甚受りて事跡乃修よ

一見黄花只日羞蕭然後髪不禁秋誰人為整



鳥紗帽猶倚西風滿眼愁

越約月九日乃得

履齒殿翻印淡沙（此句乃落帽於斜西風也）

借黃鸝林上甘公在菊祀

杜牧九日寄公堂（此句乃得小）

江漸秋氣厚初飛與空樓臺上（此句乃得小）

手口笑菊舞頻插滿院歸他掃（此句乃得小）

不用定心愁若暉方（此句乃得小）

猶沾衣

○今日菊祀代多黃（此句乃得小）

菊祀九月一取一純中九月一日一月令廣義（此句乃得小）

十日國俗今日一取一衣（此句乃得小）

十日一取一衣（此句乃得小）

十三日倭俗今宵月夜書（此句乃得小）

善奴（此句乃得小）

漢明（此句乃得小）

又月（此句乃得小）

又月（此句乃得小）

又月（此句乃得小）

又月（此句乃得小）

傳記

くれの昧月乃どくまたるなまそそをりてはるけり

後系忠通号法性 寺敷 九月十三夜既月待し

用胞寂く月和除あんのぞ属宿秋を巨柿まじ沙波あつちのまき

渡あひ雪ゆき物もの持もち家か持もちのの経きやう踏ふみ石いし昇あが十三夜じゅうさんや既あつち勝まさ於お秋あき

百年ひゃくねん完まはるる若わか今いま相あひま傳たつ前まへ折をり回まわ首くび見み渡わた明あ世よ夕ゆふ價げ本ほん全ぜん

晦日沐浴

は月部つきべ遊あそして血ち脈まとと鼓つ之の

上旬じやうじゆん小こ麦まきとうとう下旬げんじゆんに大だい麦まきとと商あへへ麦まき秋あきうう冬ふゆ

交まじ熟じやくととるる秋あき四し時じ乃の氣きとうとうとと月つき令しやう度ど義ぎより

堀ほり肥い饒にぎりりちちをを下したへへゆゆ世よのの甚た意い義ぎととくく久く久く

十月以後十二月初じゅうごご

元もと葉はととああ九月くわがつ以もつああ取とりりれれ八はち日にちにに乾かんへへ十月じゅうごつ以もつ後ご

採とりりのの陰いん乾かんへへととああ多たとと久くええよりよりああれれのの

交まじ株かととるる葉は八はち日にちにに乾かんへへ冬ふゆととるる葉は陰いん乾かんへへととす

ととありあり但た世よ業ごう種しゆ落らく葉は荊きん芥かいらら七しち本ほんととハハ久くへへとと烈れつ日にち

小こちち世よハハ氣きううととくくたたりりかかええううんんととははりり財ざいををとと収しゆて

陰いん又また平へいへへ

は月牡丹芍薬及竹徳果木つげとうとうへへ植うててよよとと月

令しやう度ど義ぎよりよりええよりより農のう政せい全ぜん書しよよりよりくく元もと果くわ木ぼくととうう

ゆゆりり先さき九月くわがつ乃の中ちゆうにに後ご樹じゆののままりりととありありてて繩なはとと

